

「りんごの木の下であなたを産もうと決めた」

重信 房子著

「育児」が活動家を変えた



幻冬舎・1500円

黒髪をストリートにとかし、どこか物づいで、知的な切れ長の眼を向きを向けるモノクロ写真。七〇年代、中東関係で日本人が関与した事件のとき、よくマスコミに登場したその顔は、学生運動の女性闘士を象徴するに充分だった。ところが、パレスチナ解放人民戦線とともに武装闘争を行った日本赤軍の最高指導者である彼女は、昨年末、突然大阪で逮捕される。髪を切り、両手でガッツポーズをとりながらテレビ画面に登場した結末に戸惑った人も少なくなかったはずだ。これはそんな一人の活動家が、アラブの地でパレスチナ戦士との間にできた二十七歳になる娘の日本国籍取得のため、警視庁留置場で書きつづけた法務局宛の上申書であり、同時に彼女自身の生い立ちと考えを語るエッセーにもなっている。

「共生には、あるがままの姿で出会うという、正直な出会いが必要です。革命組織とか、解放運動といっても、所詮、人間と人間の関係が基本です」

連合赤軍の幹部など、かつての左翼活動家が獄中で手記を発表することは多いが、この

著にはそれらに共通する「氣負い」といったものが感じられない。それは、「育児が私を変えた」と本人も言うように娘の存在が大きく影響している。八歳の誕生日、自分の素性を一大決心で打ち明けたとき「三歳頃から知っていたけどいつも隠すようにしていたから知らないふりをしていただけ」と言っている。肉親も他者であり、認識を変えようとはそうたやすいことではない。むしろそばにいるからこそ、彼らが指導することになった大衆以上に裏返った形をとってくる場合さえある。どんな有能な理論をもってしてもだ。また湾岸戦争の直前、バグダッドで在イラクの日本人釈放を主張した裏話などもあり、あらためてわずかな情報の一部しか触れていなかったと実感させられる。

よど号ハイジャック犯の娘たちの入国も話題になっている。世紀がかわり歴史が次の世代へ移りゆく予感はあるが、本著を読むと当人たちができるだけ「個人」として自らの過去を明かすことこそ求められている気がする。